

## 入選

テーマ：多様性を認め合う社会をめざして  
「思いやりの対話」

新潟県立新潟高等学校3年 朝妻航祐

「きつ、きききつ、き起立！ きつききき、き、」。見かねた先生が私の代わりに「気をつけ、礼」と号令をかける。周りのクスクスという笑い声と好奇の目が痛かった。何よりも自分で最後まで言えなかったことが悔しかった。

私は吃音症である。吃音とは言葉がスムーズに出ない病気で、成人のおよそ1%がこの病気とされている。人によって症状の程度はさまざまで、私は連発型と難発型という症状を併せ持っており、最初の言葉が出にくく、さらに何回も同じ音を繰り返してしまう。先に挙げた例は私にとってはよくあることで、大勢の前で話すときはいつもつかえてしまう。

私はよく笑われる。確かにおかしなしゃべり方だから仕方ないことだ。「落ち着いてしゃべれよ」「なんでそんな話し方するの」は私がよく言われる言葉だ。吃音を知らない人がそんな言葉を私にかけるとはごく自然なことだ。以前はこれらのことが嫌だった。馬鹿にされているような気がしたからだ。しかし、今は違う考えをもっている。過去の自分は、周囲に何も説明しないままに相手に理解を求めていた。周りが自分の病気を知らないことに一人で不満を募らせていた。中学生のとき、自分の吃音についてよく考えた時期があった。他の吃音者や言語聴覚士の先生、また家族や友達と話をした。多くの人が、私が考えていたよりも「吃音」ではなく話す中に目を向けてくれたことが分かり、とても驚いたことを覚えている。このことが転機となり、自分の中で気持ちの整理ができた。今では吃音を自分の個性とみなせるようになっていく。

吃音を自分の個性とみなすということは、開き直っているわけでは

ない。楽に考えるということである。笑われることも嫌でなくなった。今では初対面の相手にも軽い感じで吃音のことを話して、「つかえたら笑ってください」と言っている。そうすることで、以前よりも活発なコミュニケーションがとれるようになった。吃音は生きる上で大きなディスアドバンテージであることに変わりはないし、完治することもない。だから私はこれからも吃音とうまく付き合う方法を模索していく。

さて、世の中には小ささまざまな障害をもった人々がいる。自分の抱えているものを個性だなんて言えない人もいれば、社会にそれをどんどん発信している人もいる。人に笑われることが嫌な人もいれば、気を遣わずに接してほしいと思う人もいる。人によって考えていることはさまざまで、どれも尊重されるべきだ。それゆえ、健常者を含め、すべての人が納得できるゴールは存在しないと考える。だから、私に大切にすべきだと思うことは「対話」である。自分の気持ちを相手に伝え、相手の気持ちを理解しようと努力することだ。私は多くの人と対話することで自分の将来に活路を見出すことができた。相手がどうしてほしいのかを知ること、コミュニケーションは円滑になるだろう。

さらに話を広げてみる。人種、性別、思想、出身など同じ人間でも多くの違いがある。中には差別や偏見が生まれることもある。多様性を認め合う社会をめざす上で必要なことは「対話」だと考える。対話を始めることは難しい。しかし、始めさえすれば必ず見えてくるものがある。自分と違う人を無視してはいけない。目の前の相手を主観であれこれと決めつけるのではなく、相手の身になって考える。思いやりの対話が必要である。